「今日の説教、聴き手のために」　2008/12/14　明治学院教会(136)
（このプリントは毎週作っているものです）　岩井健作

「マリア、その名は」

新約聖書　ルカ福音書１章４６節－５６節

待降節のテキストをご一緒に学びたい。
「マリヤの讃歌」（ルカ1:46-56）から三つのことを学ぶ。

1、　第一は、この賛歌（神をほめたたえる歌）には旧約以来の賛歌の伝統がある。
①「ミリアムの歌」。イスラエル民族のエジプト脱出の際、その出来事に、神の御手のあったことを最初に歌った女性の歌。マリアの讃歌の原形。「主にむかって歌へ。／主は大いなる威光を現し／馬と乗り手を海に投げ込まれた。」（出エジプト15:12 p.119 新共同訳）。紅海の奇跡へのミルアムの信仰告白がある。
②「ハンナの祈り」。（サムエル記上2:1-10）マリアの賛歌の原形はここにある。ハンナが子供の与えられることを願った祈りだが、じつは、ペリシテ人の奢りを打ち砕いた神の御業への賛歌。ペリシテの軍事力によるイスラエル制覇を阻止したのは、神の人サムエル。その物語の最初を彩る歌である。ルカの「権力ある者を、その座から引き降ろし」（2:52）という思想はここからきてる。この思想の流れは、イザヤ「苦しんでいた人々は再び主にあって喜び祝い、貧しい人々は、イスラエルの聖なる方のゆえに喜び踊る」(29:19) に繋がる。

2、第二は「寄り掛からない生き方」ということ。賛歌の「身分の低い」という言葉はマイナスの価値ではない。社会的な卑屈を意味しない。逆に救いへの近さを示す。神への謙遜が、人間の尊厳となる。原語タペイノスは、４８節と５２節と二回出てくる。社会的に低い階層の人達を示す語。ルカ福音書は中間層以上の富める者たちに向けられてた書物。富みへの執着の禁止、富の積極的活用、不正の富を悔い改め、貧しい人への施しが語られる。例えばザアカイの物語。しかし、貧しいこと、虐げられていること、そのこと自身が救いだと、語られている部分がある。金持ちとラザロのお話。貧しいがゆえに救いに入れられる。「この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れてゆかれた」（16:22）。タペイノスの逆説性がよく現されている。

3。　第三は、苦しみの日々から救いに与かる事。マルチン・ルターは、「マリアのヘブル語の形は、ミリアムであって、『にがい没薬』という意味だ。」と説いた。ユダヤには、誕生の状況にちなんで子供に命名する習慣がある。とするとよほどの苦難の時、切羽詰まった危機の時に、人生のにがさを、和らげる没薬のように生まれてきた子供への名前かも知れない。「光は闇の中に輝いている」（ヨハネ１：５）。マリアという名前、「にがい没薬」はイエスの生涯、その十字架への道を暗示している。

茨城のり子さんの詩集『倚りかからず』に「苦しみの日々、哀しみの日々」という詩がある。「苦しみの日々／哀しみの日々／それはひとを少しは深くするだろう／さなかには心臓も凍結／息をするのさえ難しいほどだが／なんとか通りぬけたとき／初めて気付く／あれはみずからを養うに足る時間であったと／・・・・苦しみに負けて／哀しみにひしがれて／とげとげのサボテンと化してしまうのは／ごめんであ・・・・・」